

連載

35 在宅医療奮闘記

平成7年より
在宅を開始した

私の思い出

(医)東西会 千舟町クリニック院長

橋本 満義 (63歳・内科)

街の中心部にも
“無医村”がある。



数年前のことです。行政より介護保険要介護認定書類(主治医意見書)作成のための訪問依頼があり、市街地で独居生活をされているK氏(82歳・男性)宅を訪ねました。

K氏は、「私の身体はどこも悪くありません。介護や医療も必要ありません。しかし生活保護を受けたいのです」とおっしゃいました。ですが、K氏宅を訪問してみると、案の定、床のじゅうたんの上にはほこりとゴミがべったりと敷き詰められていたのです。K氏は、膝が痛いようで椅子に座っていました。衣服は大変汚れており、入浴はしばらくしていないとのことでした。壁にはご自身が描かれた見事な絵画がずらり

と掛かっており、また無造作に書かれた達筆な文字がそれとなく目に入りました。そしてK氏のしぐさには文化人の香りがしました。以前、南予の方に生活の居を構えていたようです。

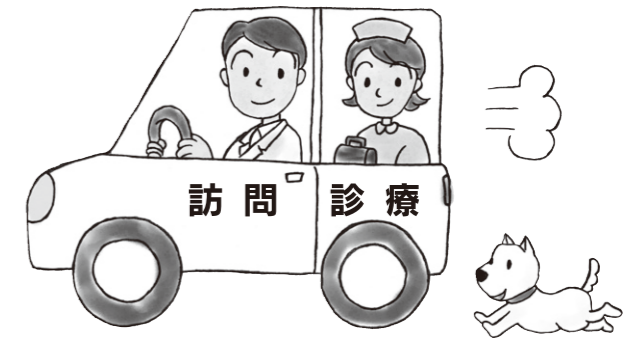
私がほこりまみれのじゅうたんに正座すると、同席していた関係者のみなさんも同じく正座されました。私と同郷であると分かり、長く楽しいお話しをしていただいたため充分な診察の時間となりました。病名は「変形性脊椎症・膝関節症」「認知症」と判断。また、五感(視覚・聴覚・触覚・嗅覚・味覚)が低下し、老化による運動障害もみられました。そして、今後の介護・医療サービスは簡単ではないだろうな、と

思いながらK氏宅を後にしたのです。

患者さんご本人は、自尊心を傷つけられたくないようです。患者さん中心の現代においては、「サービスを受けない自由」も認めなければなりません。しかし、今回の件のように、判断力を欠き、順応力を欠く独居の高齢者が招いたことだといって、見過ごしてはいわけないのです。

私たちにとっても大変な努力がいりますが、「愛」をもって奉仕しなければならない時代なのでしょう。病院の多い街の中心部でも、患者さんの状態によっては“無医村”と同じ状況になることを私たちは肝に銘じなければなりません。

「お医者さんが来てくれる」
質の高い在宅医療・看護・介護
を『千舟町クリニック』は目指しています。



機能強化型・有床 在宅療養支援診療所

(医)東西会 千舟町クリニック

松山市千舟町6-4-9 Tel:089-933-3788

<http://www.touzaikai.jp/>